《ソウル歴史散歩》

# 国王・側室・そして　ネーシの墓

足立龍枝

ソウルの北側には、東九陵・西五陵などと呼ばれる朝鮮時代の王陵がある。風水で選ばれた土地のせいか、緑豊かな場所にあり、管理が行き届いていて、四季折々の風景がみごとだ。その結果、王陵40基がユネスコ世界文化遺産に登録された。

また、王陵と宮殿(景福宮)の間には国王に仕えた人たちの墓も無数にある。

## 淑容沈氏（スギョン・シムシ）の墓碑

～むくげの会のゲスト(尹達世ユン・ダルセさん)ディに参加させてもらった～

１９９９年夏、韓国の新聞「釜山日報」東京支局長崔性圭（チェ・ソンギュ）氏が、２・２６事件を追っていたとき、東京・港区の高橋是清公園で変わった墓碑を見つけた。公園は、元高橋是清邸のあったところである。高橋是清は２・２６事件で暗殺されるまでは、日銀総裁・首相・大蔵大臣などを歴任した。

高さ１５０センチ余り、幅４３センチほど、上部にはデコレートされた笠を被っている。日本にはない墓碑である。文字は削り取られているが、前面の文字がかすかに残っていた。「淑容沈氏之墓」と読み取れる。

当時東京在住、「韓国商工会議所」に勤務していた尹達世氏に、「淑容沈氏」とはいったい誰か調べてほしいという依頼があった。

～尹達世さんの資料より抜粋～

「淑容」とは朝鮮時代の女性の従三品の官位で、王の側近で勤めた女性の宮人職、あるいは側室の官位である。墓碑から見ると側室であろうと想像できた。

次は「沈氏」の膨大な系図と歴史が書かれている族譜を持っている沈氏を探し出し、その中から、２７代の王の内のどの王の側室に上ったかを見ていくと、一人、第９代の王、成宗の側室になった人がいることが分かった。

一年後、港区と李王家の後孫との間で返還式が行われ墓碑は故郷に帰された。

墓碑の近くは、登山コースになっていて、日曜日の夕方は山から下りてくる人が多い。「津寛寺」にも近い。またそのあたり、超大型ニュータウン建設地で、ブルドーザーがいたるところに見える。登山道は地図どおりではない。ところが、ソウルの友人の息子金さんの車は回り道をしながらでも行き着いた。一人で行くつもりだったが、無理だったかもしれない。

友人は区庁や洞（町にあたる）事務所に問い合わせたりしたが、誰も知らなかったという。それでも、非常に詳しい地図を手に入れてもらっていたので、見つけることができたのだろう。

登山道から左に入る入口は、オープンになっていて、赤レンガの門柱がある。看板があって「望鄕의墓碑　還元:於日本国　東京　２００１．４．１８　←２００M」と横書き３段に大きく書かれている。７年しかたっていないのでまだ新しい。

道路から入ったところには大きな碑があり、土台は亀、韓国でよく見かける形で、「忠信公寧山君神道碑」と彫られている。墓地入口の標示みたいなものだ。寧山君は淑容沈氏と国王成宗との間に生まれた王子で、もう一人の王子、利城君の子孫とが墓を守っているようだ。

国王の場合は、広大な敷地にあって、塀で囲ってあり、管理事務所があって、誰でも入れるという訳にはいかないのだが、李家の墓はそばまで行くことができる。インターネットで見ると、子孫しか入れないと書いてあったが、管理も厳しくなかった。

しかし、墓碑が見つかり、次は写真を撮ろうと思ったら、七メートルぐらい手前に、ぐるぐる巻かれた軍事用の鉄条網が張りめぐらされていて、そばに近づけない。二度と持っていかれないようにと用心したのだろうか。返還された墓標の手前左手の黒い石に刻まれているのは「淑容沈氏墓碑還元記念碑」、あとは、ハングルで墓碑建立の経緯が書かれているようだが、遠くて角度もついていて読み取れない。（写真は２回目訪問、別の碑）

それにしても、なぜ高橋是清公園にあったのか。高橋是清と朝鮮との関係はないはずなのに。

朝鮮時代の石像物は多数日本に運ばれている。（むくげ通信に「朝鮮石人像を訪ねて」を深田晃二さんが執筆されている。参考に）

近辺では京都国立博物館の庭園に石人像１３体、他計３０個ある。高橋是清公園には港区の台帳によると、石人像・石灯篭・石塔含めて１０数個が記されている。

それらは普通植民地時代に日本に流出したものが多いと思われているが、「淑容沈氏」の墓碑は倭乱（１５９２～１５９８）のときに島津藩が持ち帰ったといわれている。石人像に飽き足らず、特に変わった珍しい「淑容沈氏」の碑は戦利品として持ち帰る値打ちがあったのだろうか。

## 日本にはないネーシの墓へ

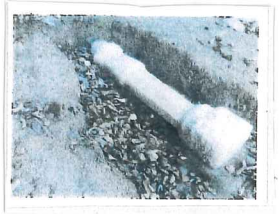
> ―６００年の歴史
> 眠りからさめる―
> 朝鮮時代の 5,000 基余の墓が恩平ニュータウン地域で発掘された。
> ○人骨・冥器・ガラス玉など
> ○統一新羅時代の青潭寺建物址も発掘
> （何からメモしたか分からないのですが…）

ソウルの友人から「ネーシの墓がたくさん見つかりました」と聞いたのは7，8年前だった。私がよく分からない顔をしたら「日本にはネーシはいなかったのですか」と聞かれた。ネーシは宦官のことで、ハングルで書くと（내시）、漢字では「内侍」と書く。

ソウルは南北境界線からわずか50キロメートルしか離れていない。当然、境界線に近いところは規制があって、家は自由に建てられなかった。それが解除されて北へ北へとどんどん開発が進み、マンションが林立するようになった。

友人の家は高陽市で、高陽市にはすでに一山（イルサン）団地という大ニュータウンができている。その一山よりもソウル市内に近いところに恩平ニュータウンを建設中だ。韓国人は全人口の3～4割がソウルに集中しているので住宅が足りない。その上より豪華な家に住みたいという欲望が開発を北へ北へと押し進めている。

見つかったネーシのお墓には行けなかったが、写真を見せてもらうと、木の寝棺がずらーっと並んでいたようだ。



300～500ぐらい見つかったとのこと。信じられない話だったが、国王の周りの男性の多くがネーシというわけだから、寝棺も100個単位だと納得できる。ごくごく一部が見つかっただけで、掘り返していないところには限りなく葬られているのだろう。国

王に近い人たちの墓ではないので副葬品も少なく、すぐに整地されマンションが建っている。工事中は塀で囲まれていたのでほとんどの人は知らない。

そして、去年秋また「ネーシのお墓があります。見に行きませんか」と誘われた。写真で見た寝棺が並んでいるのかと聞いてみると、どうも違うらしい。でも想像がつかない。

3月末、大阪からの4人グループとネーシ墓地見学に出かけた。友人の息子金さん運転のワゴン車で北へ向かって約20分、林の中に墓地らしきものが見えてきた。幅3メートルぐらいの地道の道路をくねくねと曲がりながら到着。全体がフェンスに囲まれていて、鍵を持った年配の男性が迎えてくれた。

車を降りて山の方に向かう。参道は手入れされ、全体に明かるい感じがする。不安なところではなさそうだった。入り口にある建物は墓地の管理事務所だろうか。

文官の石人像と望柱石（葱の花の形のような擬宝珠をのせた八角形のもの）が参道にばらばらと30個ぐらい見える。お墓には必ず見られる石像だ。お墓が20基ぐらい見える。500年続いた李氏朝鮮時代のどの時代の人かは分からないが、3分の1ぐらいは盛り土も低くなり、すでに詣でる人も絶えてしまったようだ。

ネーシには故郷がない。家族もいない。だから並んだ寝棺に入れられるのだ。盛り土をした墓に葬られるのは地位も高く、養子を迎えたネーシであろう。養子がしっかりしていたので墓が作れたのだ。それほど大きな墓ではないが、一基一基が離れていて、余裕のある墓地のようだった。

きれいに手入れされている墓があった。碑に刻まれた年を見ると、20年ぐらい前に立てられたようだ。代々の養子に恵まれていたのだろうか。ネーシ社会の悲惨な境遇から抜け出すことができ、出世できたネーシだろう。祭祀を行う台が新しかった。台の手前には碑を建てた養子の名前が書かれている。そして、葬られているネーシの官位や役職・名前が縦150センチ、横50センチぐらいの碑に「正憲大夫行内侍／府尚膳林公〇位」と2行に、その下に「之墓」と刻まれていた。「正憲大夫」は正二品の官位「内侍府尚膳」とは内侍府の長官、または長官を引退した長老、林公〇は名前だろう。

ネーシの中には宮廷のトラブルに巻き込まれ、責任を取って自決した人もいるだろうし、不慮の死もあっただろう。どこに葬られているのだろうか。

養子も取れず、宮殿で働けなくなったネーシたちは、職を退き宮殿の外へ出ることになる。宮殿の北西に隣接したところに「孝子洞（ヒョジャドン）」という一画がある。かつて退職したネーシが住んだところで、当時は「火者洞（ファジャドン）」と言った。北西隅の小さな門から、身の回りのものを包んでこっそりと出て行ったと想像する。そんな人たちは、多分寝棺に並べられたのだろう。

1894年、甲午改革でネーシ制度はなくなった。わずか120年前のことである。

なぜネーシ制度が日本にはなかったのか。三田村泰助著「宦官」を参考にすると、日本は古代に異民族を征服したことがない。だから征服した捕虜を去勢して絶対服従を強いることがなかったからである。また唐の文化を取り入れたころ宦官につながる「宮刑」が唐からはなくなっていたから等と書かれているが、要するに島国であったことが大きいようだ。

NHKが韓国ドラマ「イ・サン(李　祘)」を放映し始めた。今まで見ていなかった歴史ドラマをしっかり見ておこうと第1回を見ていたら、ネーシの手術場面が出てきた。アイゴー～～

縦社会の厳しい韓国を理解するには、つい最近の歴史、近代史を知らなければならないと考えながらネーシの墓地やドラマを思い出している。